

## キリシタン文献・ローマ字本の分かち書きについて

### 一 文末に観察される助辞を伴う表現 一

千葉 軒士 (中部大学非常勤講師)

#### 要旨

拙稿千葉(2009)では、1592年に刊行された『天草版平家物語』で見られる体言と助詞の分け書きから続け書きへ変化する分かち書きに関する方針という変更について、日本語の観察が進んだ結果として表出されたものではなく、体言と助詞の連結を一つにまとめて記すという、既にあった認識を広く具現化しようとしたものであった可能性を指摘した。

この考察を踏まえ、本稿では、キリシタン文献ローマ字諸本の文末表現に係る助辞とそれに前接する語との関係に注目した。結果、多くの助辞では拙稿(2009)での指摘と同様に、『天草版平家物語』の後半部分においても分かち書きの方針に変更が見られることがわかった。ただ、question markを伴う助辞についてのみ『伊曾保物語』がこの分かち書きの方針の変更点と考えられる。これは『天草版平家物語』が話し言葉習得のテキストであるのに対し、『伊曾保物語』が宣教師の説教などのためのより実践的な日本語学習テキストであったため、question markを伴う助辞がその前接する語と分かれずに記されることで、より実践的な日本語運用能力習得に寄与しようとしたものと考えられる。

#### 1. 問題の所在

キリシタン文献・ローマ字諸本を通して行われる表記の変遷について述べる中で、土井(1971)は以下のように分かち書きについて記す。

改善の方策が立てば、編纂の途中にあつても直ちに実行に移したけれども、その方法を前に遡らせて初めからやり直すといふことはしなかつたやうである。その例を一つ加へると、イエズス会で日本語を写すのに用ゐたローマ字綴で、体言につく助詞の「が」「の」「に」「を」「は」などを、初めには体言から離して書き、後には続けて書くやうになつたが、その変わり目が一五九二年(文禄元年)天草版「平家物語」の途中にあるのである。その書は「平家物語」「伊曾保物語」「金句集」の三書が合綴されてみて、「平家物語」の扉紙とその本文の巻一までは古い書き方により、巻三の終りあたりの二〇ページ前後から新しい書き方によつてゐる。(pp.56-57)

土井は1592年に刊行された『天草版平家物語』について途中まで体言と助詞が分けて記されていたものが、続いて表されるように変化していることをキリシタン文献ローマ字諸本でのイエズス会としての改善方針の適用の一例として、指摘する。これを受けた従来の研究では、この変更をイエズス会のキリシタン達の日本語観察力の向上ととらえており、またこれはその向上の結果が具現化されたものであるとしてきた。しかし、拙稿千葉(2009)で、キリシタン文献・ローマ字本全般に目を通すと、体言と助詞を続けて記すという行為が『天草版平家物語』210丁以降でも徹底されているわけではないことを指摘した。さらに、キリシタン文献全般に

において、行頭と前行末の語とのつながりを示す-(hyphen)で行頭の助詞と前行末の体言とをつなぐ例があることを指摘し、体言と助詞の結びつきを一つのまとまりととらえる意識がキリシタン版作成の初期段階で既にあったことが想定されると結論付けた。ここから、『天草版平家物語』で見られた文中に表われる体言と助詞における分かち書きに関する方針の変更は、日本語の観察が進んだ結果として表れた事象ではなく、体言と助詞の連結を一つにまとめて記するという、既にあった文法的観察を徹底して具現化しようとしたものであった可能性をうかがうことができるとした。本稿では、この「分かち」という行為をさらに文末に観察される助辞を伴う表現といった別の視点から検討することを通して、キリシタン達の日本語に対する理解を、文典や辞書とは異なる実際の使用状況から明確にすることを目的とする。

## 2. period の前

まずはキリシタン文献・ローマ字本諸本の文末における分かち書きに注目する。その理由は、ローマ字本(ローマ字表記)では、. (period)が付されることにより文の終了が明確に示されることにある。この period から文を遡ることで、文をどのように分けているかが明確になる。

このような観点でキリシタン文献を見ていくと、最後尾にくる「と(引用)」「べし」「ぢゃ」「ぞ」「か」「や」の助辞がそれに前接する語と分けて記される例が多く観察される<sup>1</sup>。そこで、この助辞に前接する語が分かたれて記されるか、分かたれずに記されるのか、キリシタン文献諸本で確認した。以下の表 1 で示す。なお、『天草版平家物語』は土井(1971)の指摘や、拙稿千葉(2009)の指摘からも、その前半部と後半部では大きく分かち書きの方針に変更がみられるため、本稿でも前半と後半で分けて精査した。ただし、その変更点は、拙稿に従い、207丁(～207丁、208丁～)に設定した。また、これ以降「と(引用)」「べし」「ぢゃ」「ぞ」「か」「や」のそれぞれを、キリシタン文献ローマ字本の表記に従い、それぞれ to・bexi・gia・zo・ca・ya と記す。

<sup>1</sup> ロドリゲスの『日本大文典』においては、これらの助詞・助動詞は助辞として説明される。また、今回は特に多用されている文末表現である「と(引用)」「べし」「ぢゃ」「ぞ」「か」「や」に絞って精査した。

表1 period 前に to・bexi・gia・zo・ca・ya が記される際の接続する語との関係<sup>2</sup>

	to.	_to.	bexi.	_bexi.	gia.	_gia.
サントスのご作業(1591)	23	114	53	72	0	0
ヒイデスの導師(1592)	2	33	61	231	0	0
ドチリナ・キリシタン(1592)	2	4	25	29	0	0
天草版平家物語 3-207 丁	0	0	1	1	2	38
天草版平家物語 208-408 丁	0	0	0	0	11	18
伊曾保物語(1592)	14	1	0	0	6	52
金句集(1593)	0	0	2	0	19	25
コンテムツス・ムンヂ(1596)	210	0	276	40	0	0
ドチリナ・キリシタン(1600)	4	0	0	0	0	0
スピリツアル修行(1607)	525	5	668	103	0	0

	zo.	_zo.	ca.	_ca.	ya.	_ya.
サントスのご作業(1591)	10	29	0	1	0	0
ヒイデスの導師(1592)	3	13	0	0	2	0
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	0	0	0	0	0
天草版平家物語 3-207 丁	0	1	1	2	0	0
天草版平家物語 208-408 丁	4	1	0	0	0	0
伊曾保物語(1592)	6	0	1	0	0	0
金句集(1593)	99	5	2	0	0	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	1	0	0	0	0	0
ドチリナ・キリシタン(1600)	1	0	0	0	1	0
スピリツアル修行(1607)	100	7	0	0	3	0

表1に注目しよう。to・bexi・zo は『天草版平家物語』の前半部までは拙稿千葉(2009)で触れた文中に表われる体言と助詞の関係と同様に分かたれて表されるものが多く、その後『天草版平家物語』の後半部から接続するものと分かたれずに表されるようになっている。このことは、拙稿で確認した『天草版平家物語』の207丁前後で起こった方針の変更が、拙稿で検討した助詞のみならず、period直前の助辞(文末表現に係る助辞)とそれに接続する語にも当てはまることを示唆する。ただ gia は、to・bexi・zo とは異なっており、『天草版平家物語』の後半部・『伊曾保物語』・『金句集』においても接続するものと分かたれて表される場合が多い。この点で gia は方針の変更の影響を受けていない可能性が考えられる。また ca・ya は使用例が少なく、積極的に傾向を読み取るには用例数が不十分である。これについては次節で触れる。

### 3. question mark の前

<sup>2</sup> 表中に用いられている    (underscore) は、その前にスペースがあり分かち書きがなされていることを示し、underscore の無いものは、直接前の語に接続していることを示す。また、これ以後示す表でもこれは同様である。

前節では、ca・yaの使用例が十分に確認できなかった。これは疑問のca・yaに後続する文終止のマーカの多くが、periodではなく?(question mark)のためである。本節では、question mark直前のca・yaにおける分かち書きの傾向を見る。また、question mark前でも多用されるzoにも注目する。以下の表2を見よう。

表2 question mark前にzo・ca・yaが記される際の前接する語との関係

	zo?	_zo?	ca?	_ca?	ya?	_ya?
サントスのご作業(1591)	12	48	1	7	30	95
ヒイデスの導師(1592)	3	56	0	0	38	225
ドチリナ・キリシタン(1592)	4	87	0	4	49	71
天草版平家物語 3-207丁	19	48	10	43	1	0
天草版平家物語 208-408丁	6	55	2	38	0	0
伊曾保物語(1592)	28	1	13	0	0	0
金句集(1593)	1	0	2	0	1	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	72	14	8	0	98	11
ドチリナ・キリシタン(1600)	67	3	1	0	137	0
スピリツアル修行(1607)	101	4	2	0	231	15

yaに関しては、『天草版平家物語』・『伊曾保物語』・『金句集』で十分な量が観察されないため、はっきりとしたことが言えないが、『天草版平家物語』前半部・それ以前の作品と『天草版平家物語』後半部・それ以後の作品とでは拙稿で確認した体言と助詞の関係のように、前者が分けて表わされる傾向があるのに対し、後者では分かつことなく表されている。これは方針の転換の影響とも見えよう。ただし、question markを伴うzo・caにおいては、先に示したgiaのように、変更点とした『天草版平家物語』207丁より後でも、助辞とその前接するものとの分かち書きがなされている。また、先ほどのgiaとは異なり、『伊曾保物語』以降では前接する語と分かれずに記されるようになる。

以上のことより考えられるのは、拙稿で触れた文中に表われる体言と助詞の関係とは異なり、文末に用いられる助辞とそれに前接するものとの関係は、『天草版平家物語』後半部から転換したというよりも、個々のケース・それぞれの作品において、分かち書きがなされていたものが次第に分かたれることなく書かれるようになっていたということである。つまり、zo・caにおける表記の変更点は、『天草版平家物語』内ではなく、『伊曾保物語』以降ということになり、これより、zo・caの分かち書きに関する変化は、ひとまず、他の助辞よりも多少遅れて起こったものと整理できる。

#### 4. hyphen との関わり

前節までで確認してきた分かち書きに関する方針の変更(当初は分かち書きがされていたものが、後期になるとされなくなっていったというものを、土井(1971)などが指摘するように、キリシタン達の理解度が増したことによる影響と単純にとらえてもよいものだろうか。というのも、拙稿でも述べたとおり、体言と助詞の関係は、方針の転換後はもちろん、それ以前にも、それを一つのまとまりとして提示した例も見られること、また偏りがあるだけで、新しい方針

への徹底した変更ではないことが確認できるためである。ここで扱った文末表現に係る助辞も同様で、偏りは見せるものの徹底した変更とはなっていない。では、この変更を一体どのようにとらえるのが適当だろうか。

ここで-(hyphen)に注目しよう。キリシタン文献ローマ字本では、一つの単語を2行に分けて書く際に-(hyphen)が用いられる。この-(hyphen)を前の行の最後に置くことで、語の継続を示すことが可能となる。ただし、この-(hyphen)は必ず用いられるものではなく、またその使用も義務的なものではない。以下の例で確認する。

**V.M. Xite Icutanomorino catania nanto att-**  
**zo?**

『天草版平家物語』267-15,16

Xite Icutanomorino catania nanto att -  
zo?

(して いくたの森の 方には 何と あった - / ぞ?)

上記の例において、1行目の行末の att(あった)の後ろに-(hyphen)が置かれ、改行し zo(ぞ)が置かれている。この例では-(hyphen)により、この att と zo は一つのまとまりと捉えていたと考えることができよう。さらに次の例を見る。

**motte, nanini yotte Qifo uo vtō toua faxeraruru**  
**zo? tadaxi<sup>t</sup> Curando dono cofo lonata uo vramu-**

『天草版平家物語』160-11,12

motte, nanini yotte Qifo uo vtō toua faxeraruru  
zo? tadaxi Curando dono cofo lonata uo vramu -

(もって 何に よって 木曾 を 討とう とは させらるる  
ぞ? ただし 蔵人 どの こそ そなた を 恨む)

この例において、1行目の行末の faxeraruru(させらるる)には-(hyphen)が付されていない。そして改行し、zo(ぞ)が置かれている。同じ zo(ぞ)であっても、-(hyphen)は付されないこともあり、-(hyphen)が必ず用いられるものではないことがわかる。

もし、土井(1971)が指摘したように、助詞を「離す」から「続ける」という「新しい書き方」が採用されたのならば、一語の連続(継続)を意味する-(hyphen)の役割にも、何らかの変化が生じているかもしれない。それを確認してみよう。以下、行頭で用いられる助辞に period および question mark が直接打たれる例において、その前行の最後の語に-(hyphen)がどれだけ付されているのかを示す。

表3 period 前の to・bexi・gia・zo・ca・ya が記される際の hyphen との関係

	to.		bexi.		gia.	
	-有	-無	-有	-無	-有	-無
サントスのご作業(1591)	1	5	0	5	0	0
ヒイデスの導師(1592)	0	3	1	11	0	0
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	0	0	4	0	0
天草版平家物語 3-207 丁	0	0	0	0	0	3
天草版平家物語 208-408 丁	0	0	0	0	0	0
伊曾保物語(1592)	0	1	0	0	1	3
金句集(1593)	0	0	0	0	0	1
コンテムツス・ムンヂ(1596)	0	0	3	6	0	0
ドチリナ・キリシタン(1600)	0	0	0	0	0	0
スピリツアル修行(1607)	2	0	37	21	0	0
	zo.		ca.		ya.	
	-有	-無	-有	-無	-有	-無
サントスのご作業(1591)	0	0	0	0	0	0
ヒイデスの導師(1592)	0	0	0	0	0	0
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	0	0	0	0	0
天草版平家物語 3-207 丁	0	0	0	0	0	0
天草版平家物語 208-408 丁	0	1	0	0	0	0
伊曾保物語(1592)	0	0	0	0	0	0
金句集(1593)	0	0	0	0	0	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	0	0	0	0	0	0
ドチリナ・キリシタン(1600)	0	0	0	0	0	0
スピリツアル修行(1607)	4	3	0	0	0	0

表4 question mark 前に zo・ca・ya が記される際の hyphen との関係

	zo?		ca?		ya?	
	-有	-無	-有	-無	-有	-無
サントスのご作業(1591)	2	2	0	0	2	6
ヒイデスの導師(1592)	0	2	0	0	0	10
ドチリナ・キリシタン(1592)	0	0	0	0	0	1
天草版平家物語 3-207 丁	1	6	0	2	0	0
天草版平家物語 208-408 丁	2	2	0	1	0	0
伊曾保物語(1592)	0	1	0	0	0	0
金句集(1593)	0	0	0	0	0	0
コンテムツス・ムンヂ(1596)	1	9	0	0	0	9
ドチリナ・キリシタン(1600)	0	0	0	0	0	1
スピリツアル修行(1607)	3	1	0	0	1	13

まず全般的に注目すべきは、一語を複数行に渡って書き表す際に用いられていた-(hyphen)という記号が、一語の連続ではなく、別の語との連続を示す際にも使用されているということである。異なる複数の語を繋ぐために-(hyphen)が用いられていることから、この hyphen で繋がれた部分は一つのまとまりとしてとらえられていたものと考えられる。これは拙稿で行頭の助詞と前行末の体言が-(hyphen)で繋いで表記されていたことと通ずるものである。また、表3・表4から『天草版平家物語』以前の作品においても、period を伴う to・bexi で1例ずつ、さらに question mark を伴う zo と ya で2例ずつ、-(hyphen)がその直前に付されている例を確認することができることから、ここにあげた助辞とそれに前接する語とを、分かち書きの方針の転換以前にも一つのまとまりと見ていた可能性が十分に考えられる。以上のことより、ここであげた文末表現に係る助辞の表記方針の変換も、拙稿で見た文中に表われる体言と助詞の関係と同様に、すでにひとまとまりとして認識されていたものを、実際の理解に即してなるべく分かつずに表記するようにしようとした変換であったといえよう。分かつもの・分かつたないものという2種の表記があったが、結果的に「分かつた方がいい」に実際の理解が大きく傾いた結果ではなからうか。

## 5. 方針の変更点のずれ

これまで見てきたように、文終止のマーカ―(period・question mark)の前で付された助辞に前接する語は、文中に表われる体言と助詞の關係に類似し、多くのものは『天草版平家物語』の208丁より、「離し」ていたものを「続け」て表記する方針に変わっていた。だが、gia や question mark を伴う文末表現(zo・ca)のように変更点がずれたものも確認できた。それはなぜだろうか。以下、それぞれについて考えてみよう。

### 5. 1. question mark を伴う zo・ca・ya

3節において、question mark を伴う文末表現の変更点は、yaのみ他の助辞と同様の『天草版平家物語』の後半にあり、zo・caは『伊曾保物語』にあるとしてきた。しかし、ここで今一度表2を見よう。表2のya部分において、『天草版平家物語』後半から『伊曾保物語』に関しては、用例が確認されない。つまり、実際には『天草版平家物語』後半に変更点があるかどうか判断し難い。そこで『天草版平家物語』前半の1例がどのような例かを確認すると、序文に相当する2丁の3行目に“nanzo motouo tçutomezu xite fuyeuo toranya?”(何ぞもとをつとめずして末をとらんや)とあり、たしかにこの例の文末では、toran と ya は分けられていない。しかし、注目すべきは、この丁を含む序文には、拙稿(2009)で指摘した『天草版平家物語』前半部における体言と助詞が多く分けて表れる、という傾向があてはまらず、すべて体言と助詞が離れずに表れている。この丁の本文外の下部にはAの字が付され、この丁を含むAの字の付された16枚が同時に印刷されていることが分かるが<sup>3</sup>、序文に続く本文では体言と助詞が分かれて表れている。ではなぜ、序文と本文で違いが生じたのか。それは、本文が日本語学習者に向けたものであるのに対し、序文はこの本の構成・作成の経緯などの記述であって必ずしも日本語学習者に必要な情報とは限らない。つまり、この本の序文と本文とで、体言と助詞の結びつきが異なるのは、この本の作成者の読み手を考慮に入れた何らかの意図によるものではない

<sup>3</sup> 豊島(2009)に詳しい。

か。

このように考えると、この ya は、序文のための例外の可能性が窺われ、前半部の特徴を示す例にならず、この question mark を伴う ya に関しても、zo・ca 同様、『伊曾保物語』成立時近辺で分かち書きがされなくなったのではないかととらえることも可能となる。そして、このようにとらえると、zo・ca・ya に関しては、question mark を伴う表現のみ<sup>4</sup>『伊曾保物語』成立段階に分かち書きの変更点があるとも考えられる。

ここで、なぜ『伊曾保物語』が疑問文の示し方の変更点となったかを考えよう。ロドリゲスが記した『日本小文典』には「品詞の配列順序」という小題内に「規則八 質問と返答について」がある。

疑問の標識は小辞 Ca(か)、Zo(ぞ)、Ya(や)、Zoya(ぞや)で、つねに疑問文の最後に置く。(p.68)<sup>5</sup>

上述のように、ロドリゲスは ca、zo、ya を疑問の標識と捉えている。とするならば、分かち書きで ca、zo、ya とその前の語とを分けて表すことは、視覚的に ca、zo、ya が疑問の標識であることを明確にする。『天草版平家物語』前半部及びそれ以前の作品では主に ca、zo、ya はその前の語と分けて表されることが多かった。が、これは行を跨いで一(hyphen)でつないだ例もあるところから、既にひとまとまりとして捉えていた認識がありながらも意図的に離すことを選んだものといえる。これが学習者にとって有用なものになりうるという理解があったためであろう。そして、この有用性は『天草版平家物語』でも適用された。そもそも土井(1971)が分かち書きの方針について「改善の方策が立てば、編纂の途中にあつても直ちに実行に移したけれども」と記すが、分かち書きの方針変更が日本語観察の向上であるならば、事象ごとに変化の生じる箇所が異なっているほうが自然な変化ではないか。

ではなぜ、『伊曾保物語』からその後の作品においても分けずに表わすようになったのか。ここで、この変更した理由を求めるために、『天草版平家物語』と『伊曾保物語』のテキストの性質が異なることを踏まえねばならない。現存する『天草版平家物語』は『伊曾保物語』と『金句集』とが合綴されたものであり、利用する学習者にとっては1冊の本である。そのすべてが単なる語学学習のためのテキストではなく、実用性に違いがみられる。その内容の違いを土井(1963)は以下のように指摘する。

天草版平家・伊曾保・金句集は全体として「且つは言葉稽古のため、且つは世の徳のため」の編纂であることがその総序に明記されてみて、本来外国人宣教師への日本語教科書を提供する目的の下に一書に集められたものである。(中略)即ち、平家物語で主に日常会話における一般の話し言葉に重点が置かれたと観れば、伊曾保物語では説教等に利用するに足る内容と調和したところの効果的な表現が考慮されてみると言へよう。(pp.70-71)

『天草版平家物語』は日常会話を学び、解釈・読解などのインプットのためのテキストとし

<sup>4</sup> period を伴う zo は、『天草版平家物語』後半部分に変更点がある。また、period を伴う ca・ya に関しては、用例が確認されない。詳しくは表1を参照されたい。

<sup>5</sup> 『日本小文典』の引用は池上(1993)『ロドリゲス日本語小文典(下)』(岩波文庫)に拠った。



て、『伊曾保物語』は宣教師としての説教・読誦などのアウトプットに特化したより実践的なテキストとして作成されたことがわかる。この実践的なテキストとして用いられた『伊曾保物語』で、ca、zo、ya が分けずに記されるようになったことを考慮に入れなければならない。つまり、『伊曾保物語』に求められたものは、より実践的な日本語であって、その際に ca、zo、ya が分かち書きで記されることが、日本語の自然な運用とは異なるものであったのではないかと。もちろん分かち書きによって生じた空白が、会話においてどれだけの間を生じさせたかについては、それを計る術は無い。しかし、実際の宣教師としての職務である説教の場において、ca、zo、ya とそれに前接する語の間にわずかばかりであっても‘間’が生じてしまうことを避けるための分かたない行為だったのではないかと。これは、キリシタン文献の各テキストを制作する側が、時間の経過に伴い、実践的な場でより自然な会話の再現を可能とするために、どのようにテキストを作成し、それをどのように表すのがふさわしいのかという模索の表れが、ca、zo、ya を分かたない表記としたものととらえることができよう。そして、この変化がこれ以後の作品にも適用された。これが question mark を伴う zo・ca・ya の分かち書きの方針の変更である。

## 5. 2. gia について

2 節で確認した gia であるが、これに関しては分かち書きの方針の変更の影響をまったく受けていないものと述べてきた。これは一体なぜであろうか。ここで考えられるのが、gia の文法的な性格と意味の性質である。

gia と極めて近似した助辞に nari(なり)がある。この nari の特徴は、まず文法的な側面においては体言相当句しか接続しないこと、また意味的な側面では存在動詞のような役割を担っていることである。この nari について、『日本大文典』に以下のような記述がある。

oNari(なり)は一種の助辞又は存在動詞であって、書き言葉に於いて往々直接法の語形の後に置かれる。(p.588)<sup>6</sup>

そしてこの nari と同様の特徴を gia も有している。以下は『日葡辞書』の引用である<sup>7</sup>。

Gia. すなわち、Degozaru.(でござる)...である。(p.315)

Nari. 書き言葉に用いる語。Degozaru(でござる)に同じ。‘...である’の意。(p.452)

またここで重要なのは、この gia に近似した nari が、ほぼその前接するものと分かち書きで記されていることにある。以下の表 5 に nari と \_nari の使用数を示す。

表 5 nari と \_nari の使用数

	nari.	_nari.
サントスのご作業(1591)	7	2490
ヒイデスの導師(1592)	12	3014

<sup>6</sup> 『日本大文典』の引用は土井(1955)『日本大文典』(三省堂)に拠った。

<sup>7</sup> gia については『日本大文典』で文法的な詳細な説明は見られない。

ドチリナ・キリシタン(1592)	1	435
天草版平家物語(1592)	0	11
伊曾保物語(1592)	0	7
金句集(1593)	0	20
コンテムツス・ムンヂ(1596)	15	1123
ドチリナ・キリシタン(1600)	3	438
スピリツアル修行(1607)	27	2490

8

このように nari は多く分けて記される。つまり、存在動詞としての nari と同様の理解がされてきたために、gia が単なる助辞としてとらえられることがなく、分かち書きの方針変更の対象から外れたのではなかろうか。

## 6. まとめ

本稿では、キリシタン文献ローマ字諸本の文末表現に係る助辞とそれに前接する語との関係を見てきた。結果、多くの助辞では拙稿千葉(2009)で確認したのと同様に、『天草版平家物語』の後半部分において助辞とそれに前接する語を分かたずに表すという分かち書きの方針に変更をしていることがわかった。

ただ、question mark を伴う助辞についてのみ『伊曾保物語』をこの分かち書きの方針の変更点としていた。これは『天草版平家物語』が話し言葉習得のテキストであるのに対し、『伊曾保物語』が、宣教師の説教などのためのより実践的な日本語学習テキストであったためである。question mark を伴う助辞がその前接する語と分かたれずに表されることで、宣教師として行うべき説教という実践的な場で求められる日本語の運用能力習得に寄与したことがうかがわれる。その方針が以後の作品においても継承されたのであろう。

いずれにしても、hyphen の例で見てきたように、文末表現に係る助辞と前接する語をひとまとまりとするとならえ方は、分かち書きの方針変更以前からなされていたことが明らかであり、ここから拙稿でも述べたとおり、この分かち書きの方針の変更は、日本語習熟度の高まりによるもの、つまり未知から既知への変化に伴う変更ではなく、既知のものをテキストの性格に応じて適切に文章上でも具現化しようという意識の表れによるものだといえよう。

### [引用および参考文献]

千葉軒士(2008)「キリシタン・ローマ字文献における s とその異体字について」名古屋言語研究第2号  
 千葉軒士(2009)「キリシタン文献・ローマ字本の分かち書きについて 体言と助詞の関係から」名古屋言語研究第3号

土井忠生(1963)『吉利支丹文献考』三省堂

土井忠生(1971)『吉利支丹語学の研究・新版』三省堂

豊島正之(2009)「キリシタン版の文字と版式」『活字印刷の文化史』勉誠出版

※使用テキストは、各種複製本によった。

8 『天草版平家物語』『伊曾保物語』『金句集』において、nari の使用例が極めて少ないのは、文体が口語である文献の特徴のためであろう。